

未来への伝承特別版

霞ヶ浦の帆曳船

140年の歴史を伝える観光帆曳船

先人たちの技術を継承する

明治から昭和40年代にかけて、霞ヶ浦のワカサギやシラウオの漁に使われていた帆曳船。

トロール船の台頭により一度は姿を消したものの、霞ヶ浦漁業の歴史を知るうえで極めて重要な文化遺産であることから、昭和40年代後半に観光帆曳船として復活しました。現在もその技術は受け継がれ、土浦市、かすみがうら市、行方市の3市で操業が行われています。

平成30年には「霞ヶ浦の帆引網漁の技術」が国選択無形民俗文化財に選定され、また、令和3年9月に「霞ヶ浦の帆引船・帆引網漁法の保存活動」が評価され、第43回サントリー地域文化賞を受賞しました。

- ・土浦帆曳船保存会
- ・サントリー地域文化賞受賞記念座談会
- ・国選択無形民俗文化財「霞ヶ浦の帆引網漁の技術」解説



①いざ出航 ②網をおろす
③～⑤力を合わせて帆を上げる ⑥風を読む古仁所会長
⑦良い風が吹き船を流す ⑧帆を中心に寄せ集めておろす ⑨網を引き上げる

風と「友」に

「そろそろ上げるぞ！」

風を読むリーダーのひと声

声を掛け合い、呼吸を合わせて

帆を上げる

船上では危険がともなう

馴染みの仲間とだからできる

霞ヶ浦の湖面を渡る風を受け、真っ白な帆を
いっぱい張って優雅に進む帆曳船。

帆曳船の操船はとも難しく、天候の影響を
大きく受けます。その日の風向きで帆を上げる場
所を決め、風の強弱を読んで帆の高さを調整し
ます。帆に受ける力、船の自重、網にかかる水圧、
この3つの力のバランスがとれることで成立する
技術です。

この帆曳船を土浦沖で運航しているのは、土
浦帆曳船保存会の皆さんです。この保存会は、
「霞ヶ浦の帆引網漁の技術」を後世に伝承してい
くことを目的に、平成26年4月1日に設立され
ました。現在、20歳代から80歳代の会員10名で
活動を行っています。メンバーは、地元で農業
を営んでいる方が多く、午前中に農作業を行い、
午後から帆曳船に乗っているとのこと。

近年は、後継者の育成に力を注いでいて、「昔
から下の名前呼び合えるような関係だから息
が合う」と、地元の若者に声を掛けて後継者を
スカウトしているそうです。30歳代で一人前に
なれるよう、ベテランは若手に実践のなかで技
術の継承をしています。

帆を上げるための秘訣は

「チームワークだっぺ」

土浦帆曳船保存会の皆さん



サントリー地域文化賞受賞記念座談会

先人たちの知恵と帆曳船のある風景を後世に残すために



土浦市長 安藤 真理子

サントリー文化財団の活動

尾崎 サントリー文化財団は、昭和54（1979）年にサントリーの創業80周年を記念して設立された団体です。社会と文化に関する国際的・学際的で独創的な研究の促進と有能な人材の発掘・育成を図る「学芸文化振興事業」と、今回受賞された、地域文化の向上に貢献する個人・団体を顕彰・支援する「地域文化振興事業」を行うなど、地域の皆さんが文化振興のために取り組んでいる活動を応援しています。

サントリー地域文化賞

の受賞ポイント

石倉 この賞は、47都道府県の地方新聞社とNHK各支局の推薦を受け、書面審査や現地調査を経て、最終的に5件の活動が選考されます。

帆曳船が選ばれたポイントは2つ。1つ目は、帆曳船自体の素晴らしさ。写真からでも分かる通り、筑波山を背景に、昔の風景そのままの見た目は、これだけで素晴らしい文化であると評

価されました。2つ目は、それを守り続ける活動です。画期的な漁法で地元の漁を産業として育んだこと、一度は無くなったその漁法を復活させたいという、地元の人たちの湧き上がる気持ちや、苦勞しながら技術を伝えている様子。また、フォトコンテストの開催など、地域全体を巻き込んだ形で行われている保存活動が評価されました。

実際の観光帆曳船の操業

古仁所 土浦帆曳船保存会は平成26（2014）年に設立されました。20代から80代までの幅広い年齢層が参加しています。活動内容は、帆曳船の運航と操業技術の継承。準備段階の出し棒、帆柱、帆桁、帆の取り付けなど、覚えなければならないことがたくさん。会員は、専業ではないため技術の習得には時間がかかります。経験を積むには乗船回数が多いを言うので、今年、この賞をいただいた記念に行っている特別操業を、来年、再来年も実施して技術の研鑽を行っていききたいと思います。



公益財団法人 サントリー文化財団
専務理事 尾崎 勝吉

保存会の若手から

帆曳船への思いと今後の抱負

大野 帆曳船に乗り始めて3年目。一番の若手は自分と同級生の2人で、28歳です。毎日天候が違い、事情も違って操業は難しいです。危険なときもあり、会長や先輩方のご指導のもと、日々精進しています。いろいろな道具の名前や使い方など、一つ一つ教わり、すべてを吸収するつもりで、一回一回丁寧に取り組んでいます。地域が誇るこの活動を、今後も続けていきたいです。

安藤 この度、長年行っている帆曳船の保存活動が、地域の文化の発展に貢献したと認められ、第43回サントリー地域文化賞を受賞したことを、大変嬉しく思っています。

今回は、土浦帆曳船保存会から古仁所会長と大野さん、サントリー文化財団から尾崎専務理事と石倉専務局長、サントリー酒類関東・甲信越支社から浜田部長、土浦市観光協会中川会長の6名が集まっていたいただきました。帆曳船への思いを存分に語っていただければと思います。

土浦市の取組み

安藤 一度は姿を消した帆曳船は、皆さんの熱い思いで、土浦市では、昭和48（1973）年に観光帆曳船として復活しました。現在、市では2艘の船を保有しています。1艘は木造船で、もう1艘はFRP（繊維強化プラスチック）製です。文化の継承という点では、木造船の帆曳船が適していますが、操業にはFRP製の船が安全であると聞いています。

地域の皆さんがさまざまな活動をしていて、かすみがうら市が行う写真コンテストでは、たくさんの方の応募があり、入賞作品は地域の大きな病院のロビーに飾られます。また、卓上に設置された帆曳船は、市で開催している模型づくりの工作教室で作られたものです。教室はとても人気があり、模型づくりを通して歴史と船の構造を学ぶことができ、地域文化の学習の機会として素晴らしい役割を果たしています。



公益財団法人 サントリー文化財団
事務局長 石倉 英一

観光産業としての 帆曳船操業の役割

中川 1300年以上前に書かれた常陸国風土記にも、霞ヶ浦周辺は、その豊かな恵みを受ける、とても素晴らしい地域と紹介されています。観光協会としても、帆曳船を保有する土浦市、かすみがうら市と行方市の3市が、「霞ヶ浦の帆曳船」という観光イメージを持つてもらえるよう努め、今回の受賞を追い風に、霞ヶ浦の観光を盛り上げていきたいです。

帆曳船は大変インパクトがあり、日本中のカメラマンがその姿を撮影するため、霞ヶ浦に訪れます。夏から秋にかけて、見学船が運航され、多くの皆さんに雄大な帆曳船の姿を見ていただいています。東京からも日帰りで遊びに来られるという利便性を生かし、休日に遊びに来てもらえるようPRしていきたいと思っています。



一般社団法人 土浦市観光協会
会長 中川 喜久治

サントリーの 帆曳船と地域とのかかわり

浜田 地域の方から霞ヶ浦と帆曳船への思いを聞き、令和元（2019）年に、霞ヶ浦の雄大な景色と帆曳船がデザインされた、1本あたり1円の寄付ができるオリジナルデザインバックのビールを発売しました。多くの方から帆曳船を応援することに賛同いただき、企画をしたことに大変意味があると認識しました。これからも地元の小売店さんと協力し、帆曳船や霞ヶ浦全体の自然保護など、地域貢献できればと思っています。

フリートーク

帆曳船の操業は大変！

どうやって動かすの？

古仁所 帆曳船は複雑。道具や使い方が覚えるだけでも大変。若い人には見て覚えろと言っているが、これからは、図面を使った理論も必要だよ。

中川 帆曳船は帆が横に広がり、横に進みますが、転覆はしないんですか。
古仁所 何故ひっくり返らないのか、皆さん一番関心を持っているようですね。理屈は簡単。帆と網、船体の中心の3箇所が重心を取っているから、ひっくり返るということはないんだ。

大野 帆の両端にロープがあり、それが舵の役割をしています。風を受けて

ロープを操るので、車みたいに簡単に舵を切ることができません。100、200m先を見て舵を切り始めないといけないんです。

尾崎 進路に障害物があるかどうか確認する人は、どこにいるんですか。

古仁所 帆と帆の間の隙間から見て、障害物を発見するんだよ。

大野 障害物など、大体どこに何があるかは把握しています。

尾崎 霞ヶ浦を熟知しているからできる技ですね。風を受けてとのことですが、風はいつも吹いているのですか。

古仁所 午後からだね。大体3時ごろからかな。お客さんも見えているから、風が無い日でも、出来るだけ帆を上げるようにしているよ。

安藤 いつでも運航している訳ではないので、皆さんあの独特の形が見られることを期待していますよね。自然相手だから、なかなか難しいですね。



サントリー酒類 株式会社
関東・甲信越支社 浜田 次郎

帆曳船に乗ることはできる？

石倉 古仁所会長が現役で帆曳船で漁をしていたときは、魚がたくさん取れましたか。

古仁所 昔は取れたよ。だけど、今は観光用で網を開いているから取れないね。

中川 見るだけでなく、帆曳船に乗せてほしいという人もたくさんいるんじゃないですか。

古仁所 よく言われるよ。でも、船に乗るのは、皆が思っているより危険なんだ。見学船から見るのが、一番おすすめじゃないかな。

船を操るのは命がけ！

チームワークが大事

尾崎 それにしても、船上が狭くて、ロープや道具がたくさんあり、相当怖んじゃないですか。

古仁所 これだけ大きな帆を張って



土浦帆曳船保存会
会長 古仁所 登

いるというのは、慣れている我々でも怖い。

大野 私も帆を上げたことがありますが、風が強いと自分の方が持ち上げられてしまうくらいです。

古仁所 だからこそ、狭い船上では意気投合したメンバーじゃないといけないんだ。

帆曳船 未来への伝承

中川 呼吸を合わせることが大事なんですね。会長は若い方をスカウトしていますが、皆さん地元の方ですか。

古仁所 そう、地元の跡取りが多いんだ。だから特に安全には気をつけているよ。FRP製の船は、安全に運航できるように土浦市に作ってもらったんだ。前に木造船に穴が空いて、沈みそうになったときは大騒ぎしたね。バーナーを何台も買ってきてみんなで乾かしたこともある。若い人はそういう経験がないから、私

のような年寄りの経験が役立つこともあるんだ。

安藤 帆引網漁の技術の習得には年配の方の経験も必要だということですね。その一方で、大野さんのように若い方が保存会に参加してくれていて心強いです。

尾崎 資料だけではなく、会長のようない知恵を持った人がいるということが強み。さらに技術の伝承という点で、後継者がいる活動には未来がある。老・壮・青のバランスが取れていて、皆さんが協力している。船に乗ったらお互いの命に責任を持つので、強い信頼関係で結ばれているんですね。

中川 まさに運命共同体ですよ。帆曳船のような漁法は全国的にみても珍しいです。試みに「帆船 漁」で検索すると、霞ヶ浦の帆曳船がすぐにヒットします。帆曳船のPRが上手くいっているのではないでしょうか。

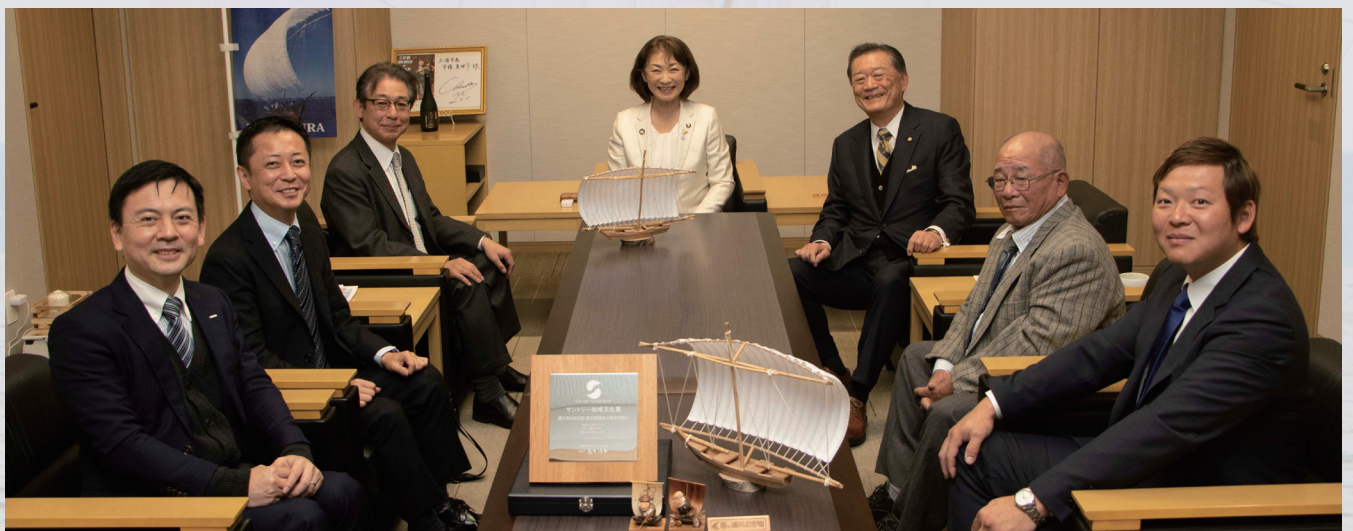
安藤 平成30年には、国選無形民俗文化財にも選定されました。また、現在、大学や当市の学芸員が、民俗学や技術的な面から調査を行っています。

地域の宝である帆曳船を、より多くの方に知ってもらえるよう、これからも努めていきたいと思っています。

(掲載の都合上、敬称は省略しています)



土浦帆曳船保存会
大野 恭章



帆曳船のある風景

11月13日、20日(土)に行われた受賞記念の特別操業を中心に、帆曳船のある風景の写真を集めました。帆曳船を間近で見たことがある方も、まだ見たことがない方も、夏から行われる帆曳船の操業をご覧ください。令和4年の操業は、7月21日(木)から始まる予定です。



国選択無形民俗文化財

『霞ヶ浦の帆引網漁の技術』

解説——市立博物館 ☎ 824・2928

国から無形民俗文化財として選定を受けた漁法

帆引網漁は、帆に受ける風を読みながら船を横に滑らせるようにして風下へ流し、漁獲をする独特の漁法です。明治時代に考案され、霞ヶ浦・北浦で広く行われてきました。霞ヶ浦では昭和42（1967）年にトロール漁が解禁となり、帆曳船は一時期その姿を消しましたが、観光帆曳船として復活しました。

帆引網漁では、帆の上げ下げや帆に取り付く手綱により、帆に受ける風を調節しながら船を操ります。そして、船首・船尾に取り付けられた「出し棒」からの「出し縄」と、帆桁からの「つり縄」によって網口を立体的に広げて、水中の網を引いていきます。船を安定させながら漁を行うためには、帆に受ける力（風力）、網にかかる水圧（抗力）、船の自重（重力）の3つの力のバランスを保つことが必要です。帆と網のバランス、そして複数の網を巧みに操る技術を組み合わせさせた点がその最大の特徴です。そ

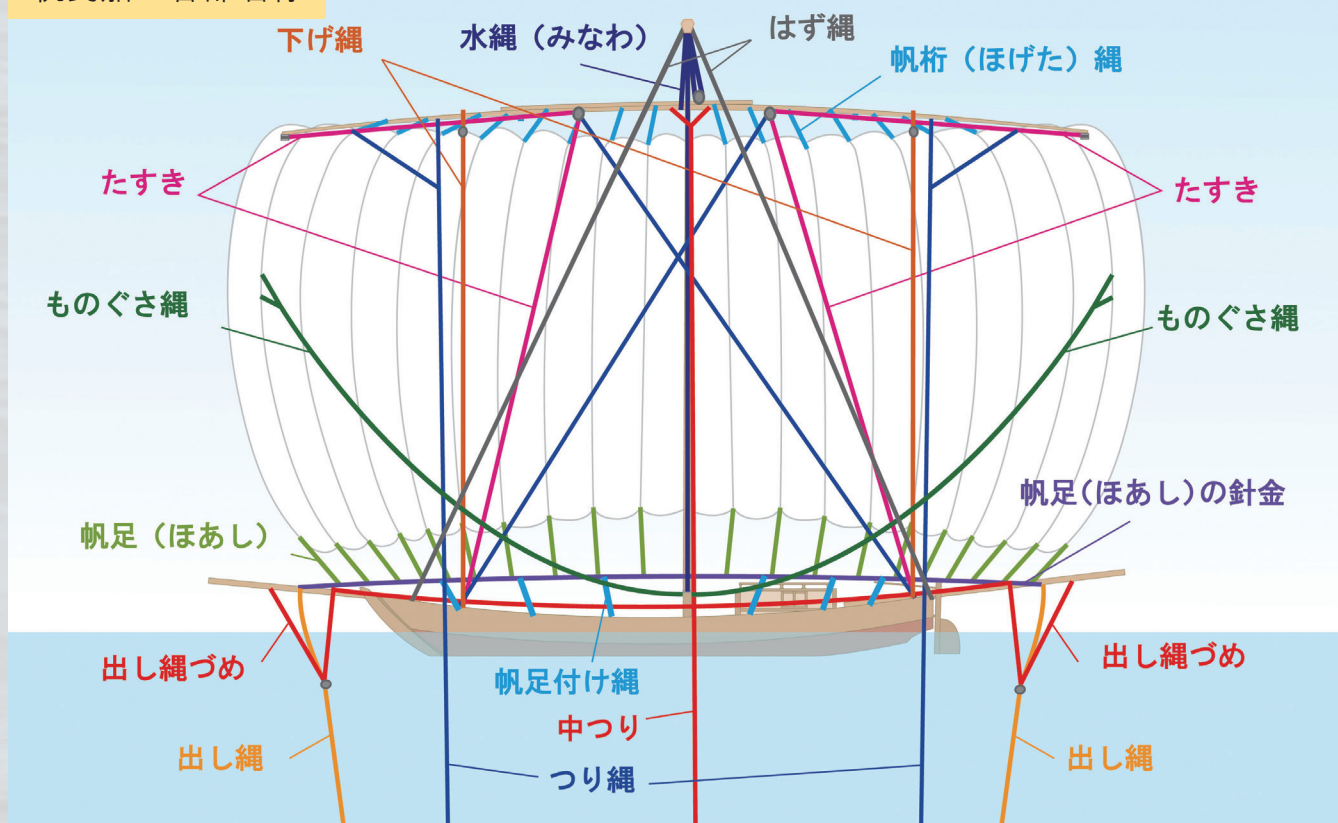
の独自の操業技術が注目され、平成30（2018）年に「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」（国選択無形民俗文化財）の選定を受けました。

霞ヶ浦で考案された漁法

帆引網漁は、明治13（1880）年に佐賀村（現かすみがうら市坂）の折本良平によって考案されました。少ない人数で効率よく漁を行うことができたため、技術改良をしながら、霞ヶ浦・北浦で広く行われるようになっていきます。

効率よく帆引きをするためには、漁期に風向きが湖の長軸と並行になり船を長く走らせることが必要です。また、帆を張るために適度かつ一定の風力が得られることも大切です。水面が広く、周囲にさえる山などがない霞ヶ浦の自然環境が、こうした条件に適していたことも、この漁法が生み出された背景にあると考えられます。

帆曳船の各部名称



イラスト提供 (有)茨城ビデオパック

技術と知識を記録する

国選択文化財となったことを受け、土浦市・かすみがうら市・行方市の3市では、現在、帆引網漁の技術に関する総合調査を実施しています。

漁師たちは、その時々風の読みながら、帆と網のバランスを察知します。そして、帆の上げ下げをする「水縄」、帆に当たる風の量を調節し船の向きを変える「ものぐさ縄」など複数の綱を巧みに操ります。安定した漁を行うためには、漁師の知識や経験が不可欠です。そうした知識と経験を聞き取り、記録に留めていくことを調査の目的としています。

あわせて、帆引網漁のメカニズムを検証するため、水産工学的視点での調査も行っています。これまでに、船体の実測図化や船の傾き（復原力）を調べる計測が行われたほか、模型や張力計を使った実験が計画されています。

これらの調査や実験を通して、霞ヶ浦の帆引網漁の技術の文化財的価値があらためて確認されていくことになります。

「ほづき」の表記の使い分け

土浦の保存会・観光で使用している名称

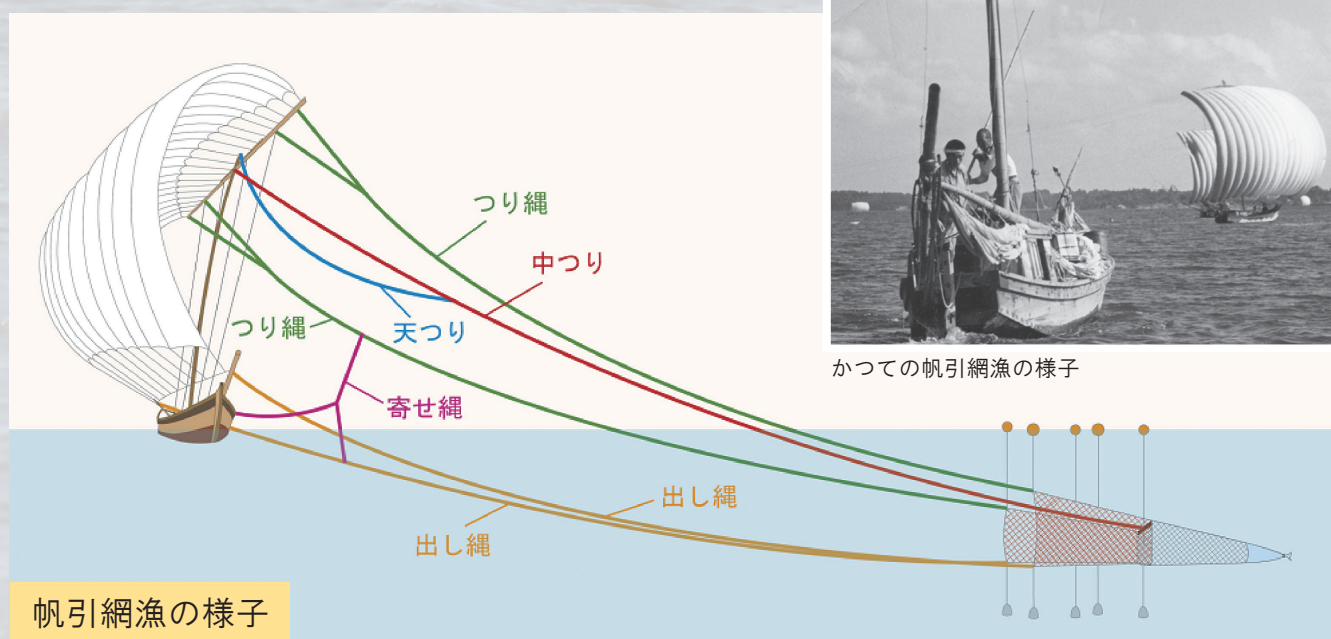
…「帆曳船」

サントリー地域文化賞の受賞名 …「帆引船」

国に文化財として選択された漁法…「帆引網漁」



かつての帆引網漁の様子



帆引網漁の様子

イラスト提供 (有)茨城ビデオパック

観光帆曳船 見学の案内

問合せ 土浦市観光協会 ☎824-2810

■観光帆曳船の運航

土浦市では、七福神丸(平成19年進水)と水郷丸Ⅱ(平成30年進水)の2艘を所有しています。青い空と湖面に白い帆が映える姿は、毎年、県内外からの見学者の目を楽しませています。

運行予定…例年7月21日～10月中旬

土・日、祝日の天候のよい日 午後1時～3時

■遊覧船の運航

帆曳船を間近で見るためには、ぜひ遊覧船をご利用ください。霞ヶ浦の雄大な自然を満喫することができます。

発着地…土浦港 乗船時間…30～40分程度



ジェットホイルつくば号 13:25発



ホワイトアイリス号 13:30発